

掘り起こしから回顧へ

——最近のウリツカヤの創作をめぐって——

岩本 和久

1. ウリツカヤについて

リュドミラ・ウリツカヤは今やロシアを代表する作家であり、『ソーネチカ』の翻訳や来日によって日本でも良く知られていると言えるだろう。チュプリニン『新しいロシア：文学の世界』では、彼女の経歴は次のように紹介されている。

1943年2月23日生まれ。疎開中のウラルで生まれ、モスクワで育つ。モスクワ大学生物学部を卒業。ソ連科学アカデミー一般遺伝学研究所で(1968-70年)、またユダヤ音楽室内劇場文学部長として(1979-82)働いた。[中略]ロシア・ペン・センターのメンバー(1997年)。メディチ賞(フランス、1996年)、「モスクワ=ペンネ」賞(1997年)、ジュゼッペ・アドセルビ賞(イタリア、1999年)、「スミルノフ=ブッカー」賞(2001年)を受賞。¹

人気のある彼女の作品は繰り返し版を重ねているため(たとえば既発表の作品を集めて、新たに短編集が編まれたりする)、その書誌を作成しようとする、少し量が多くなってしまふのだが、主な単行本だけを挙げるとするならば、以下のようなになるだろう。

- Сто пуговиц. Рассказы. М., 1983.
- Бедные родственники. Рассказы, повесть. М., 1995.
- Медя и ее дети. Повести. М., 1996.
- Веселые похороны. Повесть и рассказы. М., 1998.
- Лялин дом. Повесть и рассказы. М., 1999.
- Казус Кукоцкого. Роман. М., 2000.
- Первые и последние. Рассказы. М., 2002.
- Сквозная линия. Повесть и рассказы. М., 2002.

¹ Чупринин С.И. Новая Россия: мир литературы. Т.2. СПб., 2003. С.534.

Девочки. Рассказы. М., 2002.

Искусство жить. Рассказы. М., 2003.

Детство сорок девять. Рассказы. М., 2003.

Искренне ваш Шурик. Роман. М., 2004.

История о старике Кулебякине, плаксивой кобыле Миле и жеребенке Равкине. М., 2004.

История про кота Игнасия, трубочиста Федю и Одинокую Мышь. М., 2004.

2. 問題の所在

日本でもよく知られているウリツカヤの作品について、ここで敢えて語ろうとするのはなぜなのか？

彼女の 2 作目の長編小説である『心をこめて、シュリク』が刊行されたという事情もある。しかし、それよりも、近年の彼女の作品にはその初期の作品と比べて、一定の質的な変化が見られるのではないか、その変化は近年のロシア文化の変化と無縁ではないのではないか、そして、それらの変化は現代文化の「時空間」という問題を考える際に、見逃すことのできないものなのではないか、という筆者の考えによる。²

結論を先取りして述べるならば、社会の片隅で生きる小さな人間を通して、ロシアの過去の断片を「掘り起こして」いたかのようにであった（たとえば『ソーネチカ』や『メディアとその子供たち』）90年代半ばのウリツカヤに対し、現在のウリツカヤの過去への眼差しはより回顧的かつ自己愛的なものになっているのではないだろうか、ということである。

現代ロシア文化全般に見られるそのような変化を端的に表しているのが、たとえば『アルバートの子供たち』のテレビドラマ化である。スターリン時代を批判的に描いたということでペレストロイカ時代に話題作となったルイバコフの小説『アルバートの子供たち』は、21世紀に入った今、テレビドラマとなり、人気を集めている。ペレストロイカの時代に「歴史の掘り起こし」としての意味を持っていたこの小説は、現在、ペレストロイカ時代も含めて過去を回顧させるものなのではないだろうか？「歴史の掘り起こし」に代わって、そのような自己愛的な誘惑が現代ロシア文化を覆っていることは、否定できない事実なのではないだろうか？

ウリツカヤの創作も、そのような変化の影響をこうむっていると、筆者は考えている。しかし、賢明なウリツカヤの創作においては、自己愛的な空間に対する批判的な精神が存在していることも、また否定することはできない。

以下、2003年以降に発表されたウリツカヤの作品について、この問題を検討してみたい。

² この文章は「転換期ロシアの文芸における時空間イメージの総合的研究」（科学研究費補助金、基盤研究B、研究代表者：望月哲男）の一部として、2005年2月20日に北海道大学スラブ研究センターでなされた報告をもとにしている。

3. 大人のための童話

近年のウリツカヤは「大人のための童話」とでも言うべき、絵入りの本を出版している。それらは子供向けの本のような体裁を取ってはいるが、実のところ、子供の視点で書かれたものではない。それは社会の成り立ちや歴史を知っている者が理解しうる物語であり、かつて子供であった者に向けて書かれた作品と言えるだろう。

この文章ではそれらの物語のうち、『49の幼年時代』と『老人クレビヤキン、泣き虫の雌馬のミラ、子馬のラフキンの物語』について、述べてみたい。

『49の幼年時代』（2003）

『49の幼年時代』は96頁の「絵本」だ。ウリツカヤの短編6編と、ヴラジーミル・リュバロフによるユーモラスであると同時に淋しげでもある絵画から構成されている。絵画と短編の内容は常に一致してはいないが、しかし、まったく無関係でもない。同じ精神に貫かれているとも、相互に注釈のような関係にあるとも言える。

それぞれの短編は第2次大戦後、まだ貧しかった時代を生きる子どもたちを主人公としている。子どもの憧れや失敗を描いたその内容は、ありふれたもののようでありながら、しかし、甘美な幸福感において、また、それとうらはらの危うさにおいて際立っている。表題の「49」は「1949年」を指しているのだろう。

それぞれの物語の内容は次のようなものだ。

「キャベツの奇跡」

老婆のもとで暮らす孤児の姉妹がキャベツを買いに行くが、途中でお金をなくしてしまう。絶望した2人だったが、その前を通ったトラックから偶然、キャベツがこぼれ、2人はそれを拾う。

「蠟のアヒル」

ヴァリカはくず物屋から、蠟でできたアヒルをやっとの思いで手に入れる。彼女は後に世界的な体操選手になるが、演技の前になぜかアヒルのことを思い出す。

「ささやくお爺さん」

ジーナは兄の腕時計を持ち出すが、壊してしまう。泣きながら眠ったジーナが目を覚ますと、盲目だったはずの曾祖父が「1番大事なものだけは見える」と言って、時計を修理している。

「釘」

セルゲイは夏を村の曾祖父のもとで過ごし、大工仕事を教えてもらう。曾祖父は自分の棺を作っている。翌年の夏、曾祖父は既にこの世を去っている。

「幸運なケース」

コーリカは苦心して屋根裏部屋に忍び込むが、そこに面白いものはない。そこから戻る途中、コーリカは転落してしまうが、運良く助かる。

「紙の勝利」

子どもだちにからかわれるゲーニャを見かね、彼の母は子どもたちを家に招待する。母は子どもたちにピアノを演奏し、ゲーニャに折り紙をさせる。子どもたちは驚嘆し、ゲーニャは人気者になる。

これらの作品が描く子供の世界、傷つきやすく危うい世界は、普遍的なものである。と同時に、物語は第 2 次大戦後の貧しい生活、あるいは体操選手の活躍したソヴィエト連邦といった、ロシア人に広く共有されている記憶に支えられてもいる。

このような共有されうる懐かしさというものは、自己愛と結びついた甘美なものだ。読者は自らの過去を懐かしむように、子供たちの物語を受容するだろう。物語自体も意外性に富むものでは、決してない。にもかかわらず作品から緊張感が失われていないのは、子供たちが常に何らかの「危機」にあるため、そして、ウリツカヤ特有の抑制された平易な文体の効果のためであろう。

『老人クレビャキン、泣き虫の雌馬のミラ、子馬のラフキンの物語』(2004)

これは挿絵が多く、活字も大きめな文字通りの絵本。全 48 頁で、絵はスヴェトラナ・フィリップポヴァが描いている。

2 頭の馬と暮らすクレビャキンは、不便な村の家を出て、都会のアパートに引っ越そうとする。雌馬のミラは泣いていやがるが、クレビャキンと子馬のラフキンは彼女を説得し、街に引っ越す。やがて芸達者のラフキンはサーカスの人気者になり、彼らは世界を旅して幸せに暮らす、というのが物語の内容だ。

ナイーヴな物語のようでいて、実のところ、田舎の生活と都会の生活の双方に対するアイロニカルな批判を感じさせる作品である。彼らが安らぎを得るのは、放浪生活なのだ。

都会の生活を嫌がる雌馬のイメージは、ロシアの老女と容易に重ねることができるだろう。と同時に、善良でナイーヴなクレビャキンと 2 頭の馬は、『49 の幼年時代』に登場する子供たちと同様の危うさを感じさせる。

善良でナイーヴな人々というのは、ロシア文化を特徴づける存在だ。『イワンの馬鹿』の伝統と言うべきそうした性格は、ロシア社会においては他国以上に肯定されているように見える。その意味で、『老人クレビャキン、泣き虫の雌馬のミラ、子馬のラフキンの物語』はロシア的な「優しさ」をいつくしむテキストであると言える。クレビャキンと 2 頭の馬を愛さずして、この物語を読み通すことは難しいだろう。とはいえ、上に指摘したようなアイロニーは、この作品に甘美さとは別の、批判的な視点をもたらしている。

4. 『心をこめて、シュリク』(2004)

長編小説『心をこめて、シュリク』もまた、ロシア的な甘美な空間を、批判的な視点を導入しながら描いた作品である。

これは主人公シュリクの人生を追いつつ、今世紀初頭から 1980 年代にいたるモスクワの生活を描いた小説だ。家族の年代記という方法は『ソーネチカ』、『メディアとその子どもたち』、『クコツキイの症例』といった先行するウリツカヤの作品と共通する。

小説に登場するのはユダヤ人やリトアニア人、キューバ人といったロシア社会のマイノリティを描いているのもまた、ウリツカヤがその創作で繰り返してきたことだ。

ウリツカヤが社会の片隅の小さな存在に目を向けていることについて、沼野恭子はウリツカヤの次の言葉を引用しながら説明している。

子供のときから、私はソ連的な社会意識というものが嫌でしかたありませんでした。私に関心を持っているのは、ソ連的な人ではなく、ともかくそうした社会意識の外にいる人たち。病人や老人、障害者、精神病の人など、今の言葉でいうアウトサイダーなんです。³

シュリクは多くの女性たちに愛され、彼女たちに献身的に尽くすが、しかし、真の意味で彼女たちを愛することはない。そして、女性たちの多くは、シュリクが原因で、あるいは偶然から不幸になっていく。シュリクと女性たちの人生、また新年ごとにシュリクの家で繰り返される「クリスマス劇」を中心に、物語は進められる。

父を亡くしたシュリクは、フランス語教師の祖母と元女優の母のもとで育てられる。ある日、彼は年長の女性マチルダと知り合い、肉体関係を持つ。その後、田舎に戻ったマチルダの世話をするなど、彼は長期にわたって彼女に尽くしていくことになる。

シュリクは祖母の指導のもと、文学部の受験勉強にいそしむが、不合格となる。共に学んでいたガールフレンドのリーリャがイスラエルに移住することになり、その見送りにシュリクが家を留守にしている間に、祖母は心筋梗塞でこの世を去ってしまう。

受験に失敗したシュリクはメンデレーエフ大学に入学する。同級生のアーリャが彼のガールフレンドになるが、彼はその愛に表面的にしか応えない。一方、同級生のレーナはキューバ人の留学生エンリケと恋に落ち、妊娠する。しかし、キューバ国内の政治的事情から留学生はロシアに暮らせなくなり、レーナは未婚の母となってしまう。レーナを救うため、シュリクは彼女と偽装結婚をする。やがて、アーリャとシュリクの関係も終わる。

母の体調が悪化したことを機に、シュリクは大学をやめ、夜学で外国語を学びながら、レーニン図書館に勤めるようになる。シュリクは図書館の上司ヴァレリヤの愛人となり、彼女はシュリクの子どもを妊娠するが、階段から落ちて流産し、彼女自身も身体障害者と

³ 沼野恭子『アヴァンギャルドな女たち』五柳書院、2003年、158頁。

なってしまう。シュリクは彼女が死ぬまで、その世話をすることになる。

モスクワ・オリンピックで、シュリクはフランス語の通訳として活動する。そこでフランス人女性ジョエルと知り合う。彼女は後にロシア文学者となり、モスクワを再訪する。シュリクは彼女にモスクワを案内するが、彼女が結婚していたことを知り、軽く幻滅する。

シュリクは郵便局で偶然、スヴェトラーナと知り合う。スヴェトラーナはやがてストーリーカーのようにシュリクに付きまとい、しばしば自殺未遂を繰り返すが、多くの女性たちの世話に追われるシュリクは彼女に充分に応えることはできない。シュリクが暴漢に襲われ、入院した時、彼女は献身的に尽くすが、それも報われることはない。小説の最後に彼女は自殺してしまう。

シュリクと母はレーナの娘マーシャを引き取り、モスクワの学校に通わせる。やがてマーシャはバレエ学校に入り、頭角を現していく。しかし、レーナとマーシャは最後には、キューバから西側に亡命したエンリケのもとに去っていつてしまう。

シュリクの30歳の誕生日。知人のイリーナが料理を作り、華やかなパーティーが催されるが、他人がやってくることに母は疲れてしまふし、料理は余ってしまうし、とうまくいかなない。その夜、子供時代のガールフレンド、リーリャから電話がかかってくる。東京に向かう彼女は、トランジットにモスクワに立ち寄るというのだ。2人はモスクワを歩き、思ひ出を確かめる。しかし、東京に向かう機内でリーリャは、シュリクと別れて良かった、とメモ帳に書き留める。

『心をこめて、シュリク』の内容は以上のようなものだ。

それはマイノリティの社会を描いているがゆえに、粗筋を聞く限り、過去のウリツカヤの作品と同様のものに見えるが、しかし一読するならば、そこに漂う自己愛的な甘美さに読者は圧倒されるだろう。

その理由はいくつか考えられる。まず第1に主人公シュリクの異常なまでのナイーブさと善良さだ。彼は恋愛関係にない友達を助けるために、自らや恋人の利益をまったく考えず、偽装結婚をし、さらには、書類上、自らの娘となった少女（しかし、血はつながっていない）を、引き取って育てます。年長の女性たちには献身的に尽くし、頼まれるがままにその1人を妊娠させる。

祖母、母と息子という愛情に満ちた集団が、新年のホームパーティーを繰り返すという、小説の軸となる設定も、甘美さの要因となっている。愛情に満ちた家庭（しかし、そこには常にささやかな不幸の影が差している）という設定は、息苦しいほど暖かい。

しかし、何よりも自己愛的であるのは、この小説が過去のモスクワを愛情豊かに描いていることだ。グリンクルは『心をこめて、シュリク』の書評で、次のように語っている。

実際のところ、ウリツカヤにはまったく別の関心がある。70年代末のモスクワに対する強烈なノスタルジアだ。彼女はあらゆる頁に標識を掲げながら、モスクワを細かいディテールまで再現している。「ノヴォスロボツカヤ」駅の向いにあるパン屋、「イズマイロフスカヤ」駅の謎めいた類似療法医、モスクワ大学予科を出た人々の送別会、「クロポトキンスカヤ」駅の庭園、「プラハ」の食品店のカツレツ。⁴

この小説はモスクワに暮らした者たちを、いや、70年代のセンチメンタルなソ連映画を見たといった経験でも良い、モスクワに触れたことのある者たちを、過去の想起という甘美な体験の共有へと誘っているのだ。

『心をこめて、シュリク』のモスクワ、そこに暮らす人々は、「私たち」の過去の姿であり、そこには甘美な自己愛と悔恨に似た悲しみを読み取ることができる。しかし、長編小説である『心をこめて、シュリク』には、明らかな他者の視線を見出すことができる。

それはフランス人スラヴィストの見た研究対象としてのロシアであり（この眼差しはソヴィエト人の見たフランス、すなわち100年前の世界と対になっている）、またイスラエルに亡命した女性が10年以上の断絶を経て獲得した眼差しである。このような他者の眼差しによって、自己愛的な甘美な空間は揺るがされ、その痛ましさを顕わにすることになる。そして、こうした痛ましさをもっとも良く表しているのが、主人公シュリクの生涯なのだ。

⁴ *Ольга Гринкруг. Людмира Улицкая «Искренне ваш Шурик»// Афиша. 2004. №8 (127). С.131.*